

長瀬隆『トリウム原子炉革命』2014 に寄せて

これは科学書、技術書というより、古川和男という一人の科学者の小説ですね。この小説はすぐれた哲学、世界観に裏打ちされています。ドストエフスキーの小説を読んでいるようです。

「そして99年には当の和男氏が弟に案内されるようにして、(被爆者である幼馴染の夫人を訪ねて) 来客した。私は所用があったので挨拶しただけで外出している。もっぱらトリウム熔融塩炉について、ただそれだけについて話し、それ以外では尋ねたことに答えるだけだったという」(P.15)

この部分は古川和夫という孤独な技術者の姿をみごとに描いています。科学者によく見られる一徹さを暖かく表現しています。

それに随所に奥様のことが書かれています。このときあなたは『家内は』とも『妻は』とも書かず『わが妻は』と書いています。お二人を知っている私にとって、この言葉は感動的です。奥様をこよなく愛している、ということがひしひしと分かります。

大槻義彦 (物理学)

<http://nagasetarbou.my.coocan.jp/mitibiku.pdf>